

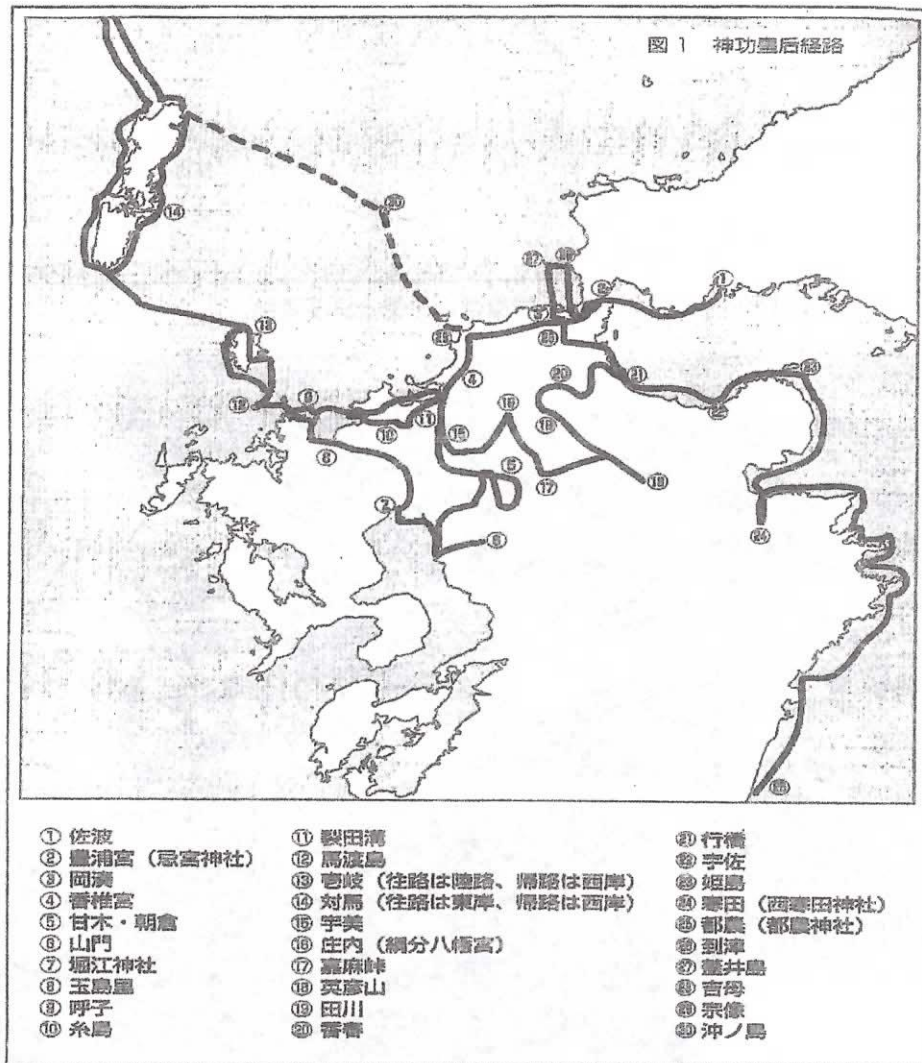
平成 24 年 9 月 8 日 (土) 13:30~15:00

アクロス福岡 2 階セミナー室 II

河村哲夫

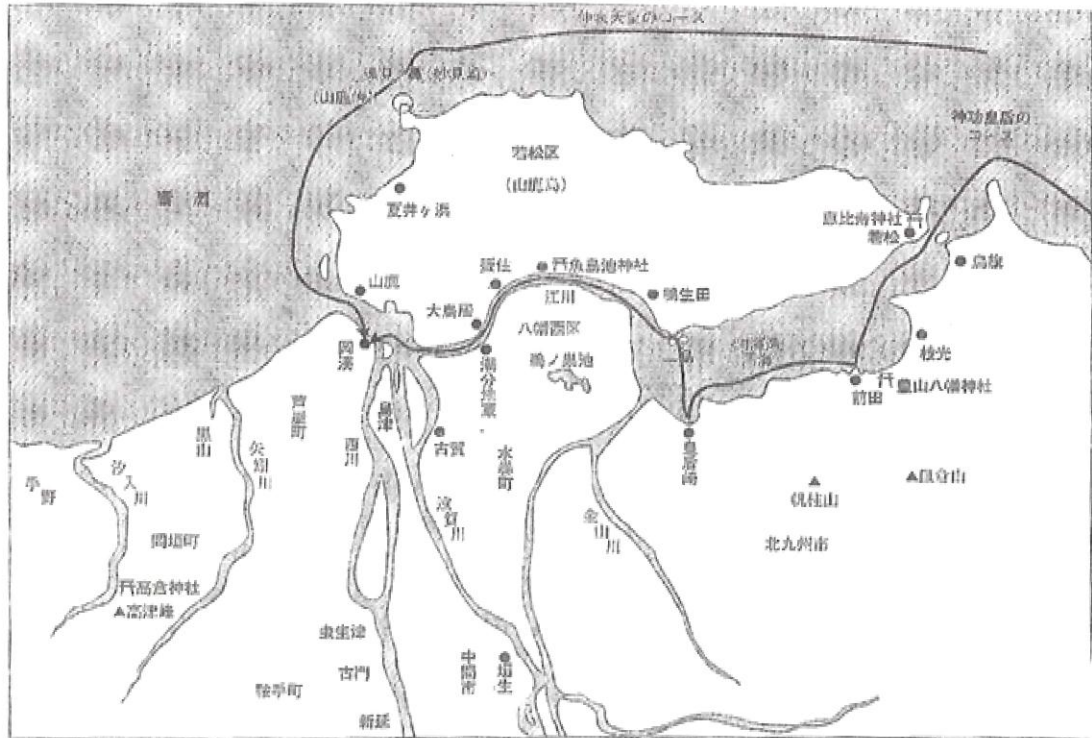
北部九州における神功皇后伝承 ～第 2 回 神功皇后の足跡～

1、神功皇后の経路



1、関門海峡・遠賀コース

佐波と豊浦宮から出発した仲哀天皇と神功皇后は、軍船を率いて関門海峡を渡り、仲哀天皇は響灘から遠賀川河口の岡湊をめざし、神功皇后は洞海湾から山鹿島(若松半島)南部の江川を通過して遠賀川河口の岡湊に到着している。



・前田八幡宮（八幡東区）

所在地の字は「中宿」といい、神功皇后の中宿が置かれたからであるという。

・皿倉山

国見岩から国見をおこない、下山の途中で日が暮れ、「さらに暗し」と神功皇后が宣したところから「さらくら山」と称するようになったという。（飛廉起風）。

・若松（北九州市若松区）

神功皇后一行がこの海岸で「神像石」を得たので大いに喜び、武内宿禰に事代主命を祭らせて若松を植えて霊地としたからであるという。（遠賀郡誌）。

・恵比須神社（北九州市若松区）

「神功皇后が仲哀天皇とは別船で大渡川を過ぎ、洞海に入られた。そのとき熊襲の成敗についてその吉凶を占うため、釣糸を垂れた。すると、海中に光り輝くものがあつたので、海士（あま）に取らせたところ、それはみごとな「霊石」であつたので、事代主のお告げであろうと大神を海浜に祀った」という。恵比須神社の境内には「霊石神社」も祀られており、社伝には、「神功皇后が武内宿禰をして吉凶をトせしめられた霊石を神体としている」

・皇后崎（八幡西区）・神功皇后にちなんで命名された。

・紅影の池（北九州市若松区）

神功皇后は装束を改めようとしたが、清水がなかつたので村人の案内により「紅影の池」という泉のほとりに立って姿を映すと、澄みきった水に顔の紅まではっきり映って見えたため、「紅影の池」と呼ばれるようになったという。

・八剣神社（八幡西区折尾大字本城字坂）・神功皇后はこの地で神祇を祀ったという。

・鶉の巢石(若松区蛸住（あますみ）)

神功皇后たちは洞海湾から江川を進んでいったが、干潮のため身動きが取れなくなった。

・魚鳥池神社(若松区大字弘川字洞北)

熊罥は、神功皇后の怒りを静めようとした。「魚鳥池」をつくらせ、そこに魚と鳥を集めて機嫌を取った。

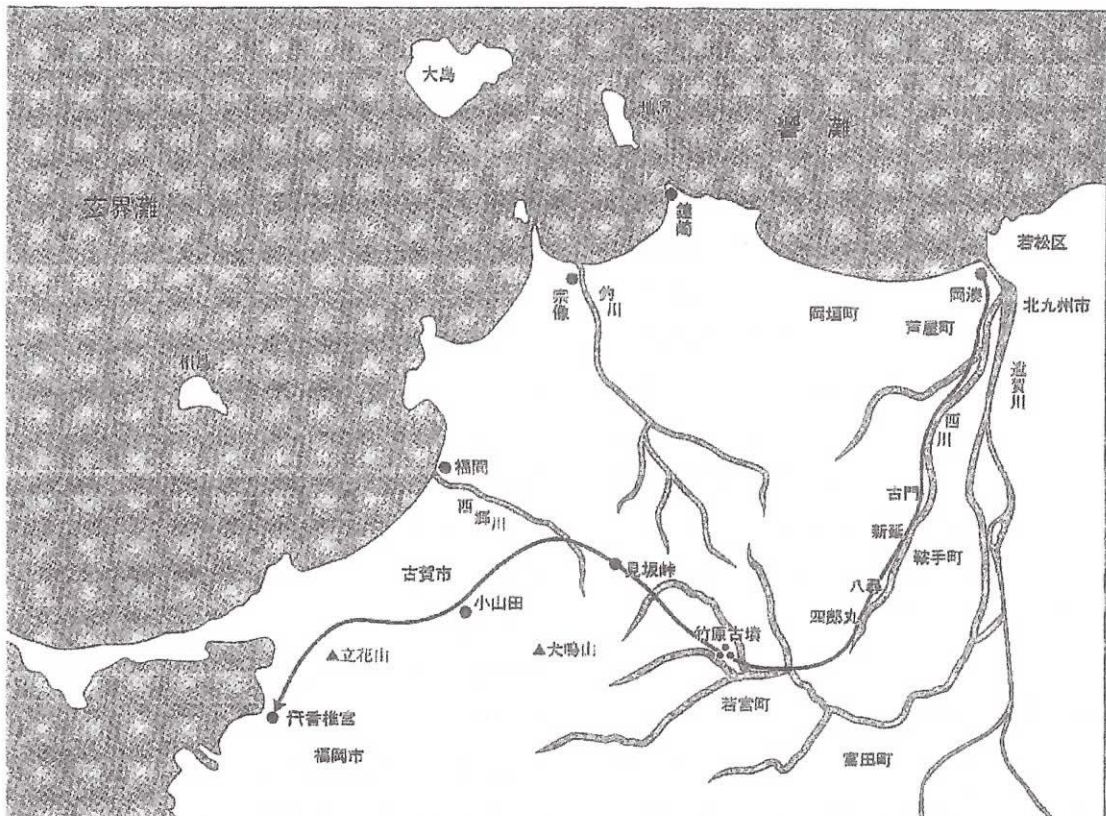
・御輿（こし）かけの松

機嫌を直した神功皇后は、三本の松の下に腰かけて魚や鳥が群れるのを眺めて楽しんだという（筑前国続風土記）。豊臣秀吉が肥前名護屋城に向かうとき、この地に立ち寄り神功皇后を偲んだという。

・皇后淵（若松区蛸住潮）

潮が満ちてきたので、神功皇后たちは再び出発した。途中、蛸住村の南四町（約四百メートル）ばかり南方の江川の中に岩が突き出た「皇后淵」という岩礁でしばらく停泊し、用心しながらゆっくりと川を進んでいったという。

2、遠賀川・香椎コース



・岡津（おかのつ）（芦屋町）

神功皇后は「岡津（おかのつ）」（芦屋町）で仲哀天皇と合流した。

・高倉神社（岡垣町）

岡の湊に着くや熊鱈は神功皇后にむかって、「この県に高津峯とって三面宝珠の山がございます。この峯に多くの神々が国家鎮護のため天降りなされます。急いでその山に登られ、朝敵討伐のことをお祈りください」と上奏したという(『遠賀郡誌』)。

・手野（岡垣町）

神功皇后が高倉神社に詣り、帰るとき鎧の小手をここに忘れたので、小手（こて）の村といったのが「こ」が抜けて、手野村というようになったという（筑前国続風土記）。

・矢はぎ川

手野村の松原の中に下山という所があり、矢筥（やの）竹が群生していた。ここで神功皇后は竹を取らせたという。その竹を切りそろえ、皮を剥いで洗った所が矢はぎ川という。

・黒山村（岡垣町）の「巖島神社」

神武天皇がお祓いをされた所であるということを知り、神功皇后もここでお祓いをしたという。

・垣生（はぶ）（中間市）

神功皇后が休憩した場所に記念して植えられた松を「御腰掛松」といい、この地の字名になったという。この地で熊襲征伐について評議が行われたという（遠賀郡誌）。

・久我神社（遠賀郡水巻町大字古賀）

祭神の彦火火出見尊（山幸彦）、鶺鴒草葺不合尊、玉依姫に捧げるため、神功皇后みずから鱸（すずき）を釣り、竹の器を作らせ、それに蓼（たで）の葉を敷いた「組の膳」に鱸を乗せて捧げたという。

・伊豆神社（水巻町大字国定）

神功皇后が政を聴いた神迹（しんせき）（聖地）という。

・虫生津（むしょうづ）（遠賀町）

この海が泥海であったときに「夜光の玉」が発見され、神功皇后がここで宝玉を磨かせたからであるという（遠賀郡誌、遠賀村誌）。

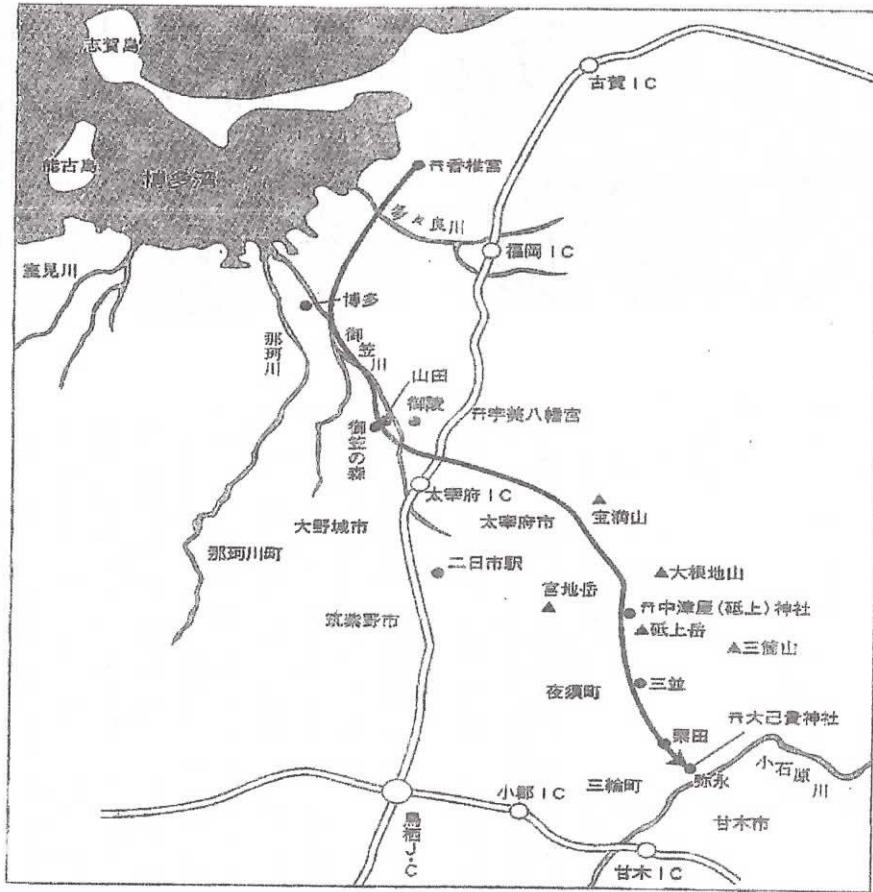
・四郎丸（鞍手町）

「笠松聖母神社」のうしろに一本の大きな松があり、神功皇后が西進のときに、その松の木に笠をかけて休んだことから「笠かけの松」転じて笠松となったという（筑前国続風土記付録）。

・見坂峠

三坂峠とも書く。神功皇后がこの峠から朝鮮半島の方角を眺めたという。

3、香椎・甘木朝倉コース



・香椎宮 (福岡市東区香椎)

仲哀天皇は香椎宮において急死した。『日本書紀』によれば、神功皇后は、仲哀天皇が香椎宮で急死するや、「いま、天下のひとびとは天皇の亡くなられたことを知らない。もし人民が知ったら気がゆるむかもしれない」といい、宮中を警護させ、ひそかに天皇の遺体を収めて、武内宿禰に命じて海路穴門に移し、豊浦宮で灯火を焚かないで仮葬したという。

・御笠川

太宰府の宝満山から福岡市博多区へ流れ、博多湾に注ぎ込む川である。神功皇后は、舟やみこしに乗って御笠川上流の太宰府方面へ向かっていった。

・中 (なか) (大野城市)

この村に宝満宮があり、社伝によると、「玉依姫命がこの地においでになって亡くなられた。よって御陵を築き、神廟を建てて崇め祀った。十二代景行天皇の時代に熊襲という賊が皇命に背いたので、天皇みずから賊を平定なされた。この時、景行天皇は御陵の宮に御祈願なされて熊襲を征伐なされた。また神功皇后も三韓を征しなされるとき、この神廟にお祈りなされた。このとき、玉依姫から神功皇后と姉妹の契りを約束する神託があった」という。近くにある大野城市立御陵中学校という名称は、この御陵にちなむ。

・山田（大野城市）

ここに「御笠の森」という森があった。『日本書紀』によると、「皇后が熊鷹を討とうと思って、樞日宮（香椎宮）から松峽宮（まつをのみや）に遷りなされた。このときつむじ風がたちまち起こって、御笠が吹き落とされた。それゆえ、人々はその地を名づけて御笠といたった」という。

・神おり峠

『筑前国続風土記』には、「三箇山の西南に長い山がある。三並、曾根田、砥上の東北にある山である。この山の西北に高い山がある。山家の方に近い。夜須郡と御笠郡の境である。神功皇后が通られたところから、神おり峠という」とある。

・砥上神社(朝倉郡夜須町)

砥上岳の南麓にあり、中津屋神社とも呼ばれる。社伝によると、「神功皇后が新羅を討とうとなされて、まず諸国の軍衆をここまで招き寄せられ、中宿なりとおっしゃられたので仲ッ屋と号するようになった。そして、軍衆に命じて、各兵器を研ぎ磨かせられた。故に砥上というそうである」

・陣ノ内（夜須町三並）

中津屋神社の東一キロに陣ノ内（夜須町三並）という所があり、そこに神功皇后の陣所が置かれたという。

・栗田（くりだ）(朝倉郡三輪町栗田)

栗田八幡宮は松峽宮の候補地。『日本書紀』は「神功皇后が羽白熊鷹を討とうとして、樞日宮（香椎宮）から松峽宮に遷った」と書いている。栗田八幡宮の近くには神功皇后の行啓の地と伝えられる「行宮森」と呼ばれる場所があり、神功皇后が舟をつないだという「船繋ぎ石」と呼ばれる岩がある（飛廉起風）。

・目配山（三輪町）

栗田の北側にある目配山の山頂に四角い石があり、この石に神功皇后が座り、四方を眺めまわしたところから、目配山というようになったという。

・大己貴神社（三輪町大字弥永）

『日本書紀』は、「秋九月十日、諸国に令して船舶を集め、兵を訓練された。ときに軍卒が集まりにくかった。皇后がいわれるには『これは神のお心なのだろう』と大三輪の神社を建て、刀と矛を奉納なされた。すると軍兵が自然に集まった」と書いている。

『筑前国風土記』逸文には、「氣長足姫尊（おきながたらしひめのみこと）（神功皇后）が新羅を討とうと思って兵士を整備して出発されたときに、道の途中で兵士が逃亡してしまった。そのわけを占ってたずね求められると、すなわち崇っている神があった。名を大三輪の神といたった。それでこの神の社を建てて、ついに新羅を征服なされた」とある。

・野鳥（甘木市大字野鳥）

神功皇后たちは小石原川（安川）上流にある。『日本書紀』には「荷持（のとり）田村（たのふれ）に羽白熊鷹という者がいる」と記されている。

・秋月(甘木市)

神功皇后が陣営を置いたという「后(ごう)の森」または「郷の森」のほ多くの伝承地がある。「後の森」、「宮園の森」、「開屋の森」、「三府の森」、「会所の森」、「宮岡の森」、「椿の森」あるいは「梅園の森」など。

・大庭(甘木市)

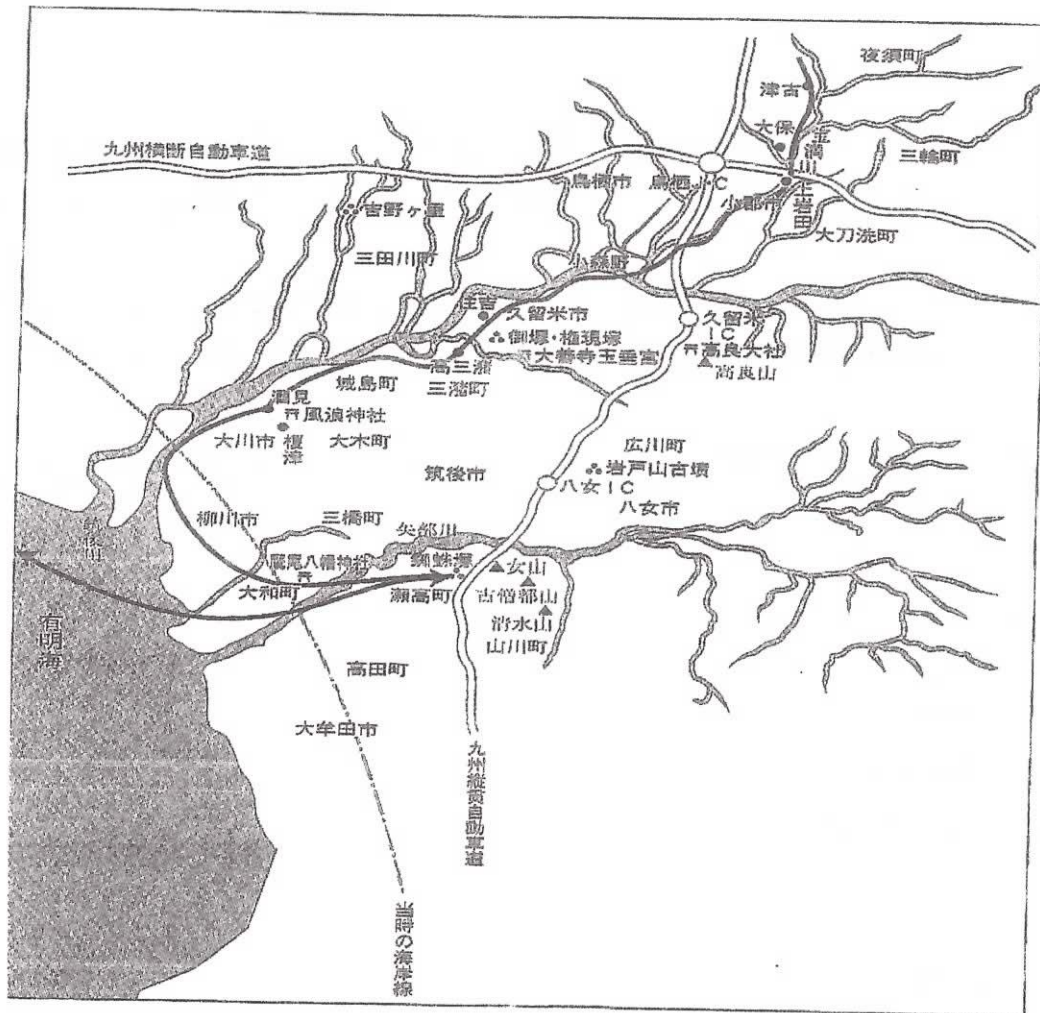
神功皇后が陣営を設けた所という。大庭村の日代(ひのしろ)は十二代景行天皇が滞在されたという。神功皇后もこの地を訪れたという。

・益富山(嘉麻市)

熊鷹は山沿いに北方へ逃げ、古処山の北東六キロにある嘉穂郡の益富山(嘉麻市・嘉穂町)で討伐されたという。このため、大熊郷と呼ばれるようになった(嘉穂郡誌)。

4、宝満川・筑後川・有明海コース

甘木朝倉地方で熊鷹を討伐したのち、神功皇后は筑後方面に軍団を移動しているが、その際にも宝満川を下り、筑後川に出ている。



<宝満川ルート>

- ・上岩田老松宮(小郡市上岩田)・御勢大霊石神社(小郡市大字大保)

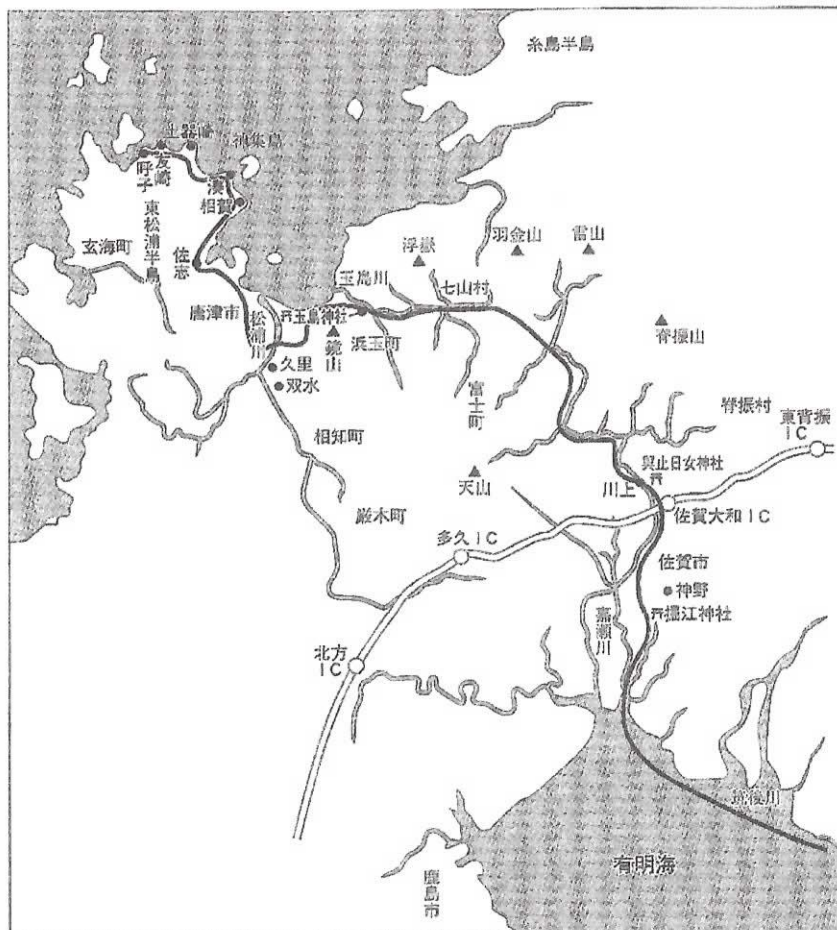
<筑後川ルート>

- ・高良大社(久留米市御井町)・高三瀨の「岸の江」・大善寺玉垂宮(久留米市宮本)
- ・榎津(大川市榎津)・酒見(大川市酒見)・風浪宮

<矢部川ルート>

- ・鷹尾神社(柳川市大和町)
- ・蜘蛛塚(瀬高町大塚の老松神社)

5、有明海・嘉瀬川・玉島川コース



- ・堀江神社 (佐賀市神野西二丁目)

『肥後古跡縁起』によると、神功皇后の御座船が堀江に入港したという。
神功皇后の歌・「ちはやぶる神もこの野に集まりて一群竹を宿と定めぬ」

- ・與止日女 (よどひめ) 神社 (佐賀県佐賀郡大和町大字川上)。

嘉瀬川 (川上川) 上流にあり。延喜式内社、旧県社であり、河上神社とも称し、淀姫神社とも書く。祭神は「與止日女神」であり、神武天皇の祖母の豊玉姫とする説

と神功皇后の妹とする説が伝えられている。

・玉島の里についての『古事記』の記事

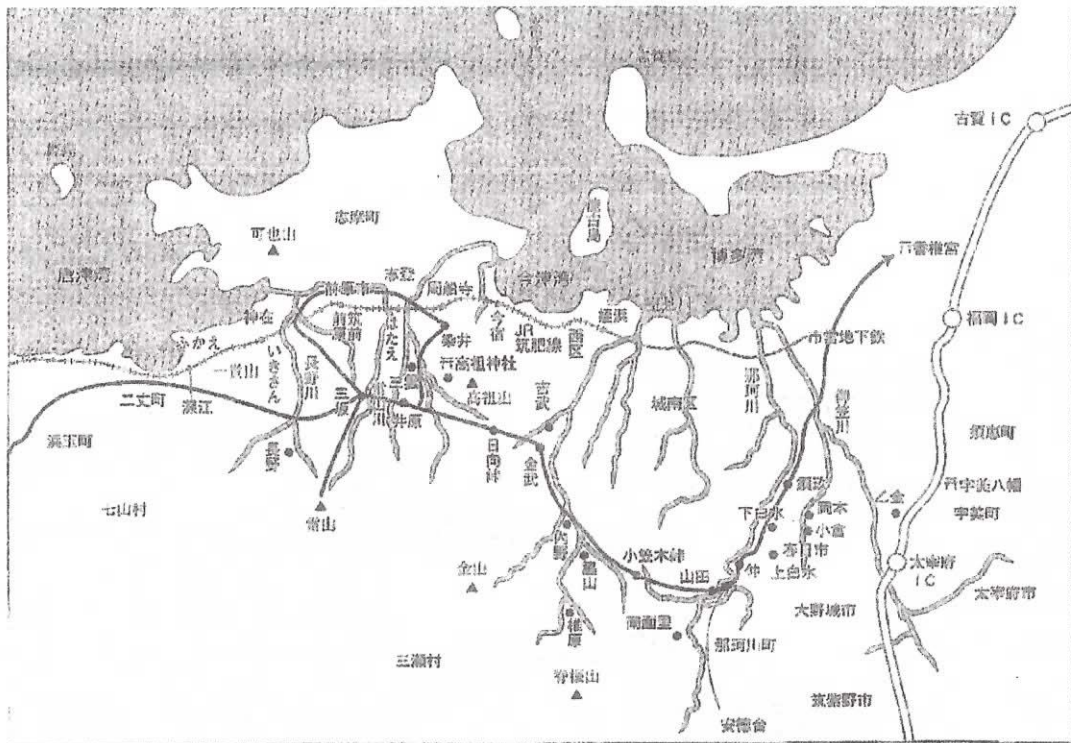
「筑紫の末羅島の玉島の里においでになって、その川のほとりで食事を取られたときに、四月の月上旬のことでしたから、その川の磯においでになり、裳の糸を抜き取って飯粒をえさにしてその川の年魚をお釣りにになりました。その川の名は小河といい、その磯の名は勝門比売といいます。いまでも四月の月上旬になると、女たちが裳の糸を抜いて飯粒をえさにして年魚を釣ることが絶えません」

・「玉島神社」(唐津市)

この神社の近くの公園に「皇后石」が陳列されており、神功皇后がこの岩石に立って鮎を釣ったという伝承が残されている。この石は「垂綸(すいりん)石」とも「紫台(しだい)石」とも呼ばれている。

神功皇后の玉島川での鮎釣りの故事にちなみ、実に明治初期まで男たちは玉島川での鮎釣りが御法度となり、女性だけしか鮎釣りをおこなうことができなくなった。

6、末盧国・伊都国・奴国コース



(1) 末盧国内のコース

・鏡神社(唐津市)

鏡山の西麓に「鏡神社」があり、一の宮の祭神は神功皇后とされている。神功皇后は新羅遠征に際し鏡山山頂に鏡を掛けて異国の降伏を祈願し、「戦勝ののちはここに鏡とともに私の靈魂をとどめます」と誓ったという。

・佐志（唐津大字佐志）

佐志に着いた神功皇后は、「あちらが、大陸ぞ」と、西北の方向を指さしていったので佐志という地名が起こったという。

・相賀（おうか）・『肥前国風土記』では「逢鹿（あうか）」

「むかし、神功皇后が新羅を征伐しようと思って行幸されたとき、道で鹿と出会った。それで逢鹿の駅と名づけた」

・湊（唐津市大字湊町）の「八坂神社」

旧暦一月十五日の祭日には厄年で参拝する人々に、厄払いの灰を振りかける行事がある。これは神功皇后が朝鮮出兵のときに、海上の霧が濃くて船が進まず柏木を燃やした灰を海に撒くと霧が消えたという伝承に由来するという。

・神集島（かしわじま）（唐津市）

神功皇后の三韓征伐のおり、この島を訪れ、戦勝祈願のため神々を集めたという（松浦古事記）。住吉神社があり、『東松浦郡誌』によれば、「住吉神社の本殿は、神功皇后三韓征伐の時しばらく滞留され、諸神を集められ、干珠・満珠の二宝を納められた神社という。このため神集島と名づけた」とある。

評議岩——評議を行った場所。丸尾山または磨王山——本宮跡地。

『万葉集』・「足日女 御船 泊(は)てけむ 松浦の海 妹が待つべき 月は経につつ」

・友（とも）・『肥前風土記』では「登望」

「郡の西北のかたにあり。むかし、神功皇后がこの地においでになって、留まって男性の装いをなされたとき、着けていた鞆をこの村で落とした。それで鞆の駅と名づけた」

・田島神社

加部島にあり。肥前国で最高の格式を持った神社。「伊勢に参るなら田島に参れ。伊勢は田島の姉じゃもの」・・稚武王(わかたけのみこ)——上松浦大明神。仲哀天皇の兄弟。

(2) 伊都国内(糸島市)のコース

・一貴・・神功皇后は一貴山村においてある神を祀ったという。

・神在・・「神有」とも書く。この地を訪れた神功皇后が、「この地には神がある」と宣したという。

・宇美八幡宮

神功皇后が仲哀天皇の陵として築かせたのが上宮で、仁徳天皇の代に平群（へぐり）木菟（つく）宿禰（すくね）の子孫の公実が気比大神を祀ったのが本宮という。代々の宮司は平群氏であった。平群木菟宿禰とは、武内宿禰の子孫とされ、『日本書紀』によると、平群木菟宿禰は仁徳天皇と同じ日に生まれたという。

・雷山・・神功皇后は雷山の頂上に登り、神に祈ったという。

・腰掛石・・雷山の麓に高野というところにある。

・旗竿山・・旗竿を採取した場所（筑前国続風土記）。

・雉琴神社・神功皇后とヤマトタケルの伝承

・染井の井戸

『筑前国続風土記』・「神功皇后が三韓征伐の折りに、この山の井戸のほとりにおいでになり、異国と戦って勝利を得ることができるなら、この鎧は緋色に染まるでしょう。もしもとの色のままであるなら、勝つことはできないでしょう。そういつて、神功皇后が白糸の鎧を井戸の水に浸されると、たちまち緋色に染まった。そのとき鎧を染められた井戸ということで、染井と名づけて今に至っている」

(3) 奴国コース

・黒男殿社

椎原川の上流の椎原に武内宿禰を祭神とする黒男殿社があり、社伝では、「神功皇后が三韓を退治なされたとき、脊振山に登られ、天神地祇を祭られた。このとき武内大臣もつき従っておいでなされた所という」とある。

・脊振神社(神崎郡脊振村大字服巻)

宗像三女神を祀る旧郷社。山頂には上宮があり、神功皇后は朝鮮出兵の武運長久を祈願したという。

・伏見神社

神功皇后の妹の與止日女(川上大明神)をこの地に祀ったところから、従前は「川上の宮」と呼んだという。後の時代に山城国伏見の「御香宮(こうのみや)」から神功皇后の御霊を移して「伏見の宮」と称するようになったという。

伏見神社の縁起・「鞍掛鯰の居る所。神功皇后が三韓征伐の時、背振山に登られ、灘の川を渡らせ給ふ時、馬の鞍に魚が飛び上がり、皇后、なまづめたい、と言われ、その魚を鯰と名付け給ふ。皇后三韓征伐の舟出で給ふ時、無数の鯰群をして舟を抱き水先案内し、戦勝されてより神の使とされた。鯰は平時姿を見せぬが、天下変事に現れる」

・馬瀬

伏見神社のやや上流に「馬瀬(うまのせ)」というところがあり、「弁財天が百濟国から来られたときに龍馬に乗ってこの瀬を渡られた。故に馬の瀬という」という伝承が残されている。

・裂田溝

神功皇后は那珂川上流の山田村(那珂川町)において、迹驚岡(安徳台)に近接する「裂田溝」という水路を穿ち神田を拓いた。

『日本書紀』・「そこで神田(みとしろ)を定められた。灘の河(那珂川)の水を引いて、神田に入れようと思われ、溝を掘られた。迹驚岡(とどろきのおか)に及んで大岩が塞がっており、溝を通すことができなかつた。皇后は武内宿禰を召して、剣と鏡を捧げて神祇に祈りをさせられ、溝を通すことを求めた。そのとき雷が激しく鳴り、その岩を踏み裂いて水を通じさせた。時の人はそれを名づけて裂田溝(さくたのうなで)といった」